

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02204

研究課題名(和文)後期コンディヤックと観念学派 - 感覚論哲学研究の総合 -

研究課題名(英文)The later Condillac and the Ideologues -- a comprehensive study of sensationalism --

研究代表者

飯野 和夫 (IINO, Kazuo)

名古屋大学・人文学研究科・名誉教授

研究者番号：30212715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではまず、コンディヤックの主に後期思想を現代の視点から捉え返し、その現代的意義を探ろうとした。具体的には、ミシェル・フーコーによる彼への言及を参考にしつつ、主に彼の後期著作である『文法』、『論理学』を検討した。彼はこれらの著作で言語論、分析理論、認識論を展開したが、それらはフランス17-18世紀(古典主義時代)の知のあり方の典型例と見なされうる。彼の分析理論や認識論は、さらに、19世紀の「臨床医学に対して認識論のモデルの役目を果たし」(フーコー)もした。本研究では、また、次世代のカバニスやデステュット・ド・トラシが、彼の思想を批判し補いながら、いわゆる「観念学」を展開したさまも検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

感覚論哲学の主導者コンディヤックについて、報告者はすでに、主に1740年代から60年代初めに至る時期の著作を研究してきた。本研究では、1770年代以降に出版されたコンディヤックの後期の著作を主に検討し、また、この研究をフーコーら現代の哲学者の思考との関連において行った。こうした研究は世界を見てもあまり例を見ない。また、報告者は以前より、もう一人の感覚論者ボネの研究も行い、本研究の一環としても、ボネの著作の翻訳出版を手がけた。次世代の観念学派の研究にも着手した。さらに、研究成果をフランス語によって国際的に発信することも行った。本研究はわが国の感覚論哲学研究を大きく広げるものである。

研究成果の概要(英文)：In this study, I first examined Condillac's late thoughts from a modern perspective and explored the contemporary significance of them. Specifically, I examined his later works, "Grammar" and "Logic", referring to Foucault's mentions of him. In these books, Condillac developed his theory of language, analytical theory, and epistemology. They can be regarded as typical examples of the way of thinking in the Occident in the 17th and 18th centuries. His analytical theory and epistemology also served as a model for 19th century clinical medicine. I also examined how the next generation, Cabanis and Destutt, developed their "Ideology", criticizing and supplementing Condillac's ideas.

研究分野：思想史

キーワード：感覚論 コンディヤック フーコー ボネ 観念学 記号 表象

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的な背景、すなわち国内・国外の研究動向と、その中での本研究の位置づけは以下のものである。

感覚論哲学は、十八世紀から十九世紀初頭にかけて西欧の思想界を代表する思潮であったし、その記号論などは、現代の視点から見ても重要な問題をはらんでいる。19世紀以降はややもすれば合理論哲学の陰に隠れる存在となったが、1960年代後半から、フーコー、デリダらがコンディヤックに注目したこともあり、今日ではフランスを中心に感覚論や感覚論者を扱う研究が充実しつつある。ただし、各論の部分、例えば本研究で扱うコンディヤックの後期思想や次世代への影響などについては、研究はいまだ充実しているとは言えない。一方、日本では、コンディヤックについて、複数の研究者によって研究が本格化し始めた段階である。

本研究の目的は、これまでの個人的な研究の蓄積の上に、国内外で未だ研究の進んでいない後期コンディヤックにおける感覚論哲学、とりわけ記号論の展開を跡づけ、彼の思想の全体像を明らかにすることであり、さらには、コンディヤックの思想が、デステュット・ド・トラシ、カバニスら次世代の観念学派に受け継がれる道筋を見出すことである。

また、報告者はこれまで感覚論哲学の現代的な意義を検討してきたが、本研究においても、その意義をさらに明らかにしようとする。

次に、報告者個人がこれまで行ってきた研究と本研究の関係は以下のものである。

報告者は、大学院修士課程以来、コンディヤックとならぶ感覚論哲学者ボネについての研究を継続している。1987年にパリ第一大学に提出した哲学史の博士論文(フランス語)もボネを対象としたものである。一方、コンディヤックについても、1995年に研究論文を発表して以来、研究を継続している。

コンディヤックが現代の代表的哲学者であるジャック・デリダに刺激を与え、その考察の対象となったことから、報告者はコンディヤックの思想と現代の思想との関係についても研究を進めてきた。こうした観点から、報告者は2006年に、デリダの重要な著作でありながら、それまで日本ではほとんど論じられなかったコンディヤック論『たわいなさの考古学』(1973)を翻訳出版した(人文書院)。また、2009年には論文「デリダのコンディヤック読解 自同性の問題を中心に」において、デリダを手がかりに、コンディヤック哲学を貫く、真実は一つの「自同的」な体系を成しているという考え方を考察した。

こうした研究の蓄積の上に、報告者は、平成21~23年度(2009~2011年度)の科研費基盤研究(C)「コンディヤックとボネを通して見る感覚論哲学とその記号論」で、特にコンディヤックの哲学の現代的意義を探った。その成果として、論文「コンディヤックの動的人間観 欲求の理論とその展開」(2012年)において、コンディヤックが人間の精神活動について極めて動的なとらえ方に到達していたことを、記号の働きの理解にも注目しつつ提示した。この科研費研究では、また、十八世紀中葉に匿名の手写本の形で発表された『世界形成論』を、感覚論哲学と親和的な性格を持った著作として発掘した。報告者はその成果として、この著作の翻訳と解題を『啓蒙の地下文書 II』(法政大学出版局、2011年)の一部として刊行した。

次いで報告者は、平成24~26年度(2012~2014年度)の科研費基盤研究(C)「コンディヤックとボネに見る感覚から知性への発展」において、人間精神の発達過程についての感覚論の立場からの解釈を跡づけた。その成果として、論文「初期コンディヤックにおける人間精神の高次の機能の素描」(2013年)において、コンディヤックが自身の『人間知識起源論』の中の、記号を介した精神の発達にかかわる内容を、一度テキストを書き上げた後に「組み換え」ようとした経緯を論じた。さらに、「コンディヤックの記号概念」(2015年)では、人間の知性の発展に重要な役割を果たすとされた記号についてのコンディヤックの思考を跡づけた。

さらに、フランス語論文「Condillac face à Condillac」〔コンディヤックに向き合うコンディヤック〕(2016年)では、記号を介した人間精神の発達のあり方を究めようとするコンディヤックについての考察を整理し、その成果をフランス語で国際的に発信することを試みた。

以上に見たように、報告者はボネとコンディヤックについての研究成果を蓄積してきた。とりわけコンディヤックについては、現代思想の観点も取り入れて研究を進めてきた。

## 2. 研究の目的

ここまでに見たような、学会の動向、そして個人的な研究の蓄積を背景として、本研究の具体的な目的は、国内外で未だ研究の進んでいないコンディヤックの後期思想を検討し、その思想の全体像を明らかにしつつ、続く世代(主として観念学派)の思想への影響をも跡づけることである。

また、現代の諸研究を参考にして感覚論哲学を現代の視点から捉え返し、その現代的意義を探ることである。

## 3. 研究の方法

本研究においては、上に掲げた具体的な目的のために、以下のように研究を実行する予定を立てた。

コンディヤックの後期思想、具体的には、『文法』(1775)、『考える技術』(1775)、『推理する技術』(1775)、『論理学』(1780)、『計算の言語』(遺稿、1798)、さらには、社会理論ではある

がコンディヤックの思考方法を考察する上で重要な『交易と政府』(1776)を研究する。

感覚論の要点は、人間における知性の発展過程の分析にあるが、その過程で重要な役割を果たすとされた記号にかかわるコンディヤックの思考の推移を浮き彫りにする。

さらに、後期にまで至るコンディヤックの思想の全体像が明らかになることを受けて、次世代の観念学派の哲学者であるデステュット・ド・トラシ (1754-1836)、カバニス (1757-1808) らに、コンディヤックの記号論がどのような影響を与えたかについても本格的に分析する。

なお、研究を進める際には、現代の哲学者・研究者の著作をつねに参照し、感覚論の現代的意義を探るという視点を持ち続ける。報告者は先にコンディヤックについてのデリダの解釈を検討したが、本研究では、フーコーによる解釈が検討されることになる。

#### 4. 研究成果

上に具体的な目的として掲げた点についての研究成果は以下の通りである。

研究期間の内、2016(平成 28)年度は、コンディヤック後期思想を検討する前提として、中期の時期の「自由論」を検討した。この成果は、論文「コンディヤックの自由論 - ロックの自由論との比較のもとに -」(名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第 38 巻第 2 号、2017 年 2 月、pp.87-115)として公表した。

コンディヤックは人間の自由を、後期に先立つ中期とも言える時期の『感覚論』(1754)と、それに付属する『自由についての論考』(1754)にまで至る諸著作で論じた。コンディヤックの時代、決定論的傾向は物質界から精神の領域にまで拡大したため、各論者は人間の自立性と自由の擁護に腐心した。コンディヤックは、精神の領域にも決定性を認めた上で、まず精神の能動性に注目して人間の自由を肯定しようとした。次いで、『自由についての論考』で、人間の意志自体も自由であると言っている根拠を探った。そこでは、ロックにも似て、「熟慮」に比重を置き、知性に従うことが自由であるとする、知性中心の自由概念が示された。ここにおいて、人間の自由は人間が自在に思考を、したがって記号を操ることとなり、記号概念と関係することになる。

また、講演「フーコーの見たボネとコンディヤック」(2017 年 2 月、名古屋大学退職記念講演)においては、M. フーコーのコンディヤック理解に関連させて、後期の『交易と政府』(1776)にまで至る、コンディヤックの言語論と交易論を検討した。これらは広義の記号論の一部をなす議論である。

2017(平成 29)年度は、コンディヤックの後期の著作『論理学』(1780)における分析理論と、その 19 世紀臨床医学への影響を、フーコーの著作と関連させて検討した。その成果は、論文「フーコー『臨床医学の誕生』におけるコンディヤック」(名古屋大学大学院人文学研究科『人文学研究論集』第 1 号、2018 年 3 月、pp.99-128)として公表した。

コンディヤックの分析の概念は、初期の『人間知識起源論』(1746)で最初に唱えられ、後期の『論理学』(1780)に至って再び論じられる。前者においては、次のように定義される。「分析はただ、私たちのさまざまな観念を組み立てたり分解したりし、そこから諸観念をさまざまに比較したり、それによって諸観念相互の関係や諸観念から生じうる新しい観念を発見することである」(『起源論』I-II-VII-66)。後者においては、次のように言われる。「分析とは、ある対象のさまざまな性質を継起的〔時間的〕秩序において観察し、それらの性質が実在においてもつ同時的な秩序を精神においてもたせることにほかならない」(『論理学』I-II)。結局、分析とは、対象の秩序を精神において再構成することであり、その際、対象の生成変転の過程の観察を手がかりにし、観念の分解と組み立てを通して、その生成変転をできる限り正確に跡づけること、となる。

さて、フーコーの『臨床医学の誕生』(1963)は、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてのフランスを中心とした臨床医学の変遷をたどったものだが、この著作でフーコーは、コンディヤックの「論理学」が 19 世紀の「臨床医学に対して認識論のモデルの役目を果たした」と評価している。いまだ病原体が未発見であったこの時代、臨床医は、コンディヤックに由来する「分析」の方法を意識しながら、観察を通して病気を分析、再構成しようとした。分析を支えた記号体系は、計算の論理の試行を経て、言語の形への転写や、「化学モデル」へと変遷した。そうした中で、医師のまなざしは徐々に病める生体の病理的反応に注がれうるようになった、とフーコーは論じているのである。

他方、コンディヤックと同時代の同じ感覚論哲学者であるシャルル・ボネの代表的著作『心理学試論』(1755)を、順次刊行中の「十八世紀叢書」の一部として国書刊行会より翻訳出版するという企画が以前よりあった。諸事情により休止状態にあったが、この企画が動き出すことが確定し、すみやかに完成すべく共訳者を立てて翻訳にとりかかった。ボネの著作は、18 世紀の大きな思想潮流としての感覚論の重要な構成要素の一つであり、また、その感覚論を、当時の精神生理学にもとづけて展開した。この生理学への注目という点で、後の観念学派にも影響を与えている。こうした点で、この翻訳出版は本研究の一環としても価値がある。

また、日本フランス語フランス文学会秋季大会(2017 年 10 月)のワークショップ「哲学的地下文書研究、成果と今後の展望」において、『トラシュプロスからレウキッペへの手紙』に見る感覚論』と題するフランス語による口頭発表を行い、18 世紀の哲学的地下文書群の中で一

番まとめて感覚論哲学を展開している、1720年代の執筆と推定されるこの著作を例に、観念学派にまで至る18世紀の大きな思想潮流としての感覚論を提示した。

本研究の三年目である2018(平成30)年度は、コンディヤックの後期思想の研究を継続した。この成果の一部は、論文「フーコー『言葉と物』におけるコンディヤック(上)」(名古屋大学大学院人文学研究科『人文学研究論集』第2号、2019年3月発行、pp.101-138)として公表した。

『言葉と物』(1966)は、初期のフーコーが西洋近代の思想史の中に知の構造的変化を読み取った重要著作である。この著作において、コンディヤックは、西洋の17-18世紀「フーコーの言う「古典主義時代」」の知に特徴的な、「表象」に基礎を置く思考方法の代表例と見なされている。この論文では、特にこの著作の第三章「表象すること」におけるフーコーの議論を検討し、コンディヤックの言語論を含む記号理論が、全体として「表象」をめぐる議論と見なされ、この時代の思考の典型例と考えられていることを明らかにした。さらに、フーコーが、古典主義時代の記号理論の一形態として言及する「生成論」が、コンディヤックの初期の『人間知識起源論』や後期の『論理学』で展開される、人間精神の働きの生成過程の分析を指していることも併せて示した。

一方、パリの「哲学国際コレージュ」の「百科全書と解釈学」についてのセミナーで口頭発表を行うことが確定し、その準備を進めた。2019年2月22日に「コンディヤックと解釈学の問題」というタイトルで、フランス語で発表を行った。

コンディヤック本来の感覚論哲学において明確に解釈のことが論じられるわけではない。だが、解釈が問題となる前提としての個人間の関係、他者との関係はどのように捉えられているのか。コンディヤックは、人間が交わす言語の起源について、人間が自然の中で言語を徐々に獲得していったと考える。人間が言語を使い交流するのは本能に基づいている。コンディヤックが語る行動言語からの言語の発展は連続的であり、「解釈」の必要性は表立っては現れない。フーコーは『臨床医学の誕生』の中で、フーコーにおいては、言語を実現させる「至上の本性」を帯びた「言語的構造」、「言語の可能性」が、「本能」のあいまいな概念の中に「隠されて」しまっていると考えている。(なお、デリダは、そのようなコンディヤックの思想の中にも、人と人との間の「解釈」が不必要であるどころか、解釈とそれによる相互理解が不可能でさえある契機を見ることがなるが、これはむしろ、報告者が翻訳出版したデリダの著作『たわいなさの考古学』の内容にかかわるところである。)

また、前年度から着手していた感覚論哲学者シャルル・ボネの『心理学試論』の翻訳を完了した。併せて「解説」も執筆し、ともに出版社へ入稿した。

本研究の四年目である2019(令和1)年度は、同じくコンディヤックの後期著作である『文法』(1775)における、言語論・記号論を新たに検討した。この成果は、やはりフーコーの著作と関連させて、論文「フーコー『言葉と物』におけるコンディヤック(中)」(『人文学研究論集』第3号、2020年3月、pp.65-104)として公表した。

『言葉と物』の第四章「語ること」は言語を扱うが、この章でフーコーがコンディヤックに言及するところを参考にしつつ、コンディヤックの後期の『文法』、『論理学』、さらには初期の『人間知識起源論』を検討、再検討した。フーコーはこの章で、コンディヤックの時代(いわゆる古典主義時代)における言語の働き方を、まず、1.動詞による表象間の帰属関係定立、2.名詞群の分節化、3.名詞の指示作用、4.名詞の意味の派生、の4つの働きの協働として考える。フーコーはさらに、それら4種の働きの特徴や関連事項を、1.表象の実在的関係の肯定、2.二本の軸に沿った分節化、微細語の機能、3.行動言語の成立、言語の恣意性、語根とその変化、4.文字表記の進歩、分析の原理、などとして詳細に分析する。ところが、フーコーは必ずしも明示しているわけではないが、これらの働きの分析のほとんどに、コンディヤックの思想が素材と分析の原型とを提供しているのである。古典主義時代の言語のあり方の分析は『言葉と物』全編の展開の根幹であり、その根幹部分において、コンディヤックの思考の痕跡がこのように多く認められることは、『言葉と物』を構想したフーコーに対する、コンディヤックの極めて大きな影響を示しているとも言えよう。

報告者は、コンディヤックの後期思想については、さらに『考える技術』(1775)、『推理する技術』(1775)を検討した。しかし、これらの著作は、現時点までに論文化することはできなかった。これについては、今後論文化していきたいと考えている。

また、シャルル・ボネの『心理学試論』の翻訳出版の企画は、校正作業に入り校了した。2020年の秋頃には国書刊行会より出版される予定である。

観念学派は周知のように、コンディヤックを師と仰ぎつつ、師を乗り越えようとした。観念学派については、本研究の2年目以降、カバニス『心身相関論』(1802)、デステュット・ド・トラシ『観念学要論』(1801-05)を検討した。これらの著作は、コンディヤックの感覚論哲学が観念的・抽象的に過ぎる点を補おうとする意図を持っていた。カバニスは、人間の内的感覚や本能の認識に対する関与を論じた。デステュットは、人間の認識において意志的な身体運動の果たす役割を評価し、人間は、そうした運動との関係で外的事物や空間の観念を得ると考えた。

このように観念学の著作の検討は進めたが、コンディヤックと観念学派の関係を、本研究の期間内に論文化するには至らなかった。今後、順に論文を発表していきたい。

フーコーとの関係では、『臨床医学の誕生』においてはカバニスが比較的大きく扱われ、『言葉と物』では、立ち入って論じられることはないものの、デステュットの名前が比較的多く言及される。一般的には、コンディヤックにおける認識の主体が抽象的存在であったのに対して、観念学派における人間は、本能などの生物学的所与も有し、運動能力も備えた具体的存在となる。その意味で、観念学派は、フーコーの言うところの、19世紀の知における「人間」の登場を準備するものであった。この「人間」の登場は、カントが先験的な諸概念、諸カテゴリーの存在を唱えたことが、思想面での現れと一般的には考えられる。しかし、観念学の環境の中から登場することになるメヌ・ド・ビランは、こうした諸概念を先験的なものと認めず、その成立の根拠を問うた。ビランは、『言葉と物』にはまったく登場しないが、19世紀に人間の有限性をめぐる分析が展開されるとフーコーが論じる場合の、その一例として位置付けてもよいと思われる。フーコーの議論との関係における、観念学派からビランへの思想の流れも、いずれ考察してみたいと考えている。

平成 28、29、30 年度に、フランス、ベルギーの合計 14 の大学図書館等で、コンディヤックの『人間知識起源論』の版による内容の異同について、以前より続けている現地調査を続した。この調査は今回で区切りをつけ、いずれ報告にまとめる予定である。

報告者は本研究の中で可能な限りの努力をしてきたが、「研究の目的」としてふれた、観念学派を中心とする続く世代の思想へのコンディヤックの影響の跡づけは予定通りには進まなかった。この問題を扱う論文の準備を進めているが、完成には至っていない。この点についての研究の進展が当初の予定より遅れた理由は、コンディヤックの後期思想の検討に予想以上に時間を使ったこと、観念学派のカバニス、デステュットの思想が検討にも思った以上に時間が必要であったこと、ボネ『心理学試論』の翻訳、および、日本フランス語フランス文学会とパリ「哲学国際コレージュ」で口頭発表を行ったことによって、本研究の方向をやや変更する結果になったこと、などにある。しかし、問題は単に、研究の幅が拡大したことによる、進捗の遅れであって、研究自体に困難を感じたことはないので、コンディヤックと観念学派の関係についての検討はこのまま遂行する予定である。

この点を除けば、4 年間の本研究期間中に、執筆論文 4 本、口頭発表 2 回（ともにフランス語による発表）、講演 1 回、18 世紀原典の翻訳 1 冊、継続的資料調査、を行い、フーコーを参照することで、コンディヤック思想の現代的意義を論じることもでき、大変充実した研究期間であった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 飯野和夫	4. 巻 3
2. 論文標題 フーコー『言葉と物』におけるコンディヤック（中）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋大学大学院人文学研究科 人文学研究論集	6. 最初と最後の頁 65-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/jouhunu.3.65	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 飯野和夫	4. 巻 2
2. 論文標題 フーコー『言葉と物』におけるコンディヤック（上）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 名古屋大学大学院人文学研究科 人文学研究論集	6. 最初と最後の頁 101-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/jouhunu.2.101	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 飯野和夫	4. 巻 1
2. 論文標題 フーコー『臨床医学の誕生』におけるコンディヤック	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名古屋大学大学院人文学研究科 人文学研究論集	6. 最初と最後の頁 99-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/jouhunu.1.99	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 飯野和夫	4. 巻 38-2
2. 論文標題 コンディヤックの自由論 - - ロックの自由論との比較のもとに - -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 言語文化論集	6. 最初と最後の頁 87-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/stulc.38.2.87	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----